

## 学校教員の対人関係満足度と Sense of coherence, バーンアウト症状の関連 —学校教員の対人関係満足度尺度の試作—

Relationship between interpersonal satisfaction, sense of coherence, and burnout symptoms among school teachers: A prototype interpersonal satisfaction scale for schools

今井田 貴裕<sup>1)</sup> IMAIDA Takahiro ・ 磯和 壮太郎 ISOWA Soutarou

(<sup>1)</sup> 人間環境大学心理学部専任講師)

In this study, an interpersonal satisfaction scale was developed for school teachers. The scale consisted of 6 items and its reliability was confirmed. It was found to be negatively correlated with communication skills, positively correlated with Sense of coherence, and negatively correlated with burnout.

**key word:** interpersonal satisfaction of school teachers, Sense of coherence, burnout symptoms

### 目的

学校教員は、管理職（校長・副校長・教頭）や同僚の教師、児童生徒、保護者、地域住民といった多様な人々との対人関係を有している。学校教員を取り巻く対人関係は、良好である場合にはソーシャルサポートとして機能し（e.g., 諏訪, 2004）ストレス反応の一種であるバーンアウト症状（久保, 2004）を低減させるであろう。その一方で、学校教員の対人関係が良好でない場合には、ストレッサーとなりうる可能性（高木・田中, 2003）があり、バーンアウト症状を増悪させる一因となるかもしれない。このように、学校教員を取り巻く対人関係は、その良悪によってソーシャルサポートにもストレッサーになりうる可能性がある。

しかし、学校教員の対人関係の良悪に注目した測度は筆者らの確認する限り存在せず、それに対してソーシャルサポートの尺度は多い。例えば、教師の認知する校長からのソーシャルサポートに関する尺度（迫田・田中・淵上, 2004）は、校長からのソーシャルサポートを道具的サポートと情緒的サポートで捉えることができる測度である。しかし、同尺度の「校長は、あなたが仕事に失敗したと知ったら、一生懸命なぐさめてくれる」といった項目は校長からのサポートの事実があったことを測定する項目である。しかし、サポートが、被サポート側にとって不適切である場合も予測される。しかし、被サポート側の立場がサポート側よりも弱い場合には、不適切なサポートを拒否することは難しいかもしれない。また、学校教員において、被サポート側の求めるサポートと実施のサポートにずれがある場合には、被サポート側のストレス反応を増悪させることが指摘されている（森, 2007）。こうしたことから、学校教員の対人関係のサポートの事実を測定したとしても、サポート自体がストレッサーとなる可能性もある。そのため、学校教員を取り巻く対人関係に対して満足度を測定することによって、対人関係の良悪を測定する必要がある。実際に、対人関

係に対する満足度に関する尺度は、大学生の友人関係（加藤, 2001）、夫婦関係（鬼頭・佐藤, 2017）などが開発されている。そこで、学校教員の対人関係満足度尺度の開発を本研究の第一の目的とした。

ところで、対人関係に満足している学校教員は健康的な心理的特徴を有すると考えられる。まず、対人関係満足度の高い人々は対人関係を良好に維持する能力を有するため、コミュニケーションスキルが高いと考えられる。実際にコミュニケーションスキルが高い一般大学生の友人関係満足度は高く（牧野, 2012）、学校教員でもコミュニケーションスキルが高い場合には、対人関係の満足度が高いことが予測される。さらに、対人関係満足度が高い学校教員は、対人関係をソーシャルサポートとして機能させることができると考えられるため、ストレス対処力である Sense of Coherence（以下SOC）（Antonovsky, 1987, 山崎・吉井監訳 2001）も高く、バーンアウト症状も低いと考えられる。以上の「対人関係満足度が高い学校教員は健康的な心理的特徴を有する」といった仮説の検討を本研究の第二の目的とした。

## 方 法

### 調査協力者

アイ・ブリッジ株式会社の調査サービスFreeasyの登録者に対して、Web上の質問票調査を行った。現職の学校教員を抽出するスクリーニング調査後に、主調査を実施した。分析対象は、主調査に回答した小学校、中学校、高等学校、特別支援学校に所属している主幹教諭と一般教諭であり、3つのダミー項目を通過した124名（男性：60名、女性：64名、平均年齢41.95歳（ $SD = 11.33$ ））であった。本研究で使用した変数は、磯和・今井田（2021）と一部重複するが、研究計画段階で予定されたものである。

### 尺度構成

学校教員の対人関係満足度を測定するために、学校教員の対人関係を1. 学校全般、2. 管理職（校長・副校長・教頭）、3. 同僚（管理職以外の教員）、4. 児童生徒、5. 保護者、6. 地域住民の6領域を著者間で協議の上設定し、それぞれの対人関係に対する満足度を7件法（「1. まったくあてはまらない」から「7. 非常によくあてはまる」）で回答を求めた。

SOCを測定するために、日本版Sense of coherence-29（Antonovsky, 1987, 山崎・吉井監訳 2001, pp.222-225）を使用した。本尺度は、29項目で構成され、7件法（例、「1. いつも混乱して見つけるのが難しい」から「7. いつも何の迷いもなく見つけられる」）で回答を求めた。なお、回答の両極の言葉は、項目ごとに異なっている。SOCは、29項目全てを用いて尺度得点を得た。把握可能感（例、あなたは、困難な問題に直面したとき、その解決法は、）は11項目を、処理可能感（例、これから、人生の大事な場面で困難に直面したとき、あなたは思うのでしょうか？）は10項目を、有意味感（例、今まで、あなた

の人生は、)は8項目をそれぞれ用いて下位尺度得点と尺度得点を得た。

コミュニケーションスキルを測定するために、ENDCORE尺度(藤本・大坊, 2007)を使用した。本尺度は、6項目(1. 自分の感情や行動をうまくコントロールする, 2. 自分の考えや気持ちをうまく表現する, 3. 相手の伝えたい考えや気持ちを正しく読み取る, 4. 自分の意見や立場を相手に受け入れてもらえるように主張する, 5. 相手を尊重して相手の意見や立場を理解する, 6. 周囲の人間関係にはたらきかけ良好な状態に調整する)で構成され、7件法(「1. かなり苦手」から「7. かなり得意」)で回答を求めた。コミュニケーションスキルは、6項目全てを用いて尺度得点を得た。

バーンアウト症状を測定するために、日本版バーンアウト尺度(久保, 2004)を用いた。本尺度は、17項目で構成され、5件法(「1. ない」から「5. いつもある」)で回答を求めた。情緒的消耗感(例, 体も気持ちも疲れ果てたと思うことがある)は5項目を、脱人格化(例, 同僚や患者と、何も話したくなくなることがある)は6項目を、個人的達成感の低下(例, われを忘れるほど仕事に熱中することがある(逆転項目))は6項目をそれぞれ用いて下位尺度得点を得た。なお、項目の一部は、森・西村・宮下・奥村・北島(2013)に倣い「患者」という表記を「児童生徒」といった学校教員向けの項目に改定した。

## 倫理的配慮

回答に際して、中断や放棄の自由を明記するなどの厳格な倫理的な配慮をした上で、調査は実施された。なお、論文の執筆にあたって、第一著者の前所属先の研究倫理審査の承認を受けた(承認番号 211)。

## 分析ツール

統計分析には、HAD(清水, 2016)のversion 17.105を使用した。

## 結果

### 学校教員の対人関係満足度尺度の項目の検討

学校教員の対人関係満足度尺度の各項目に対する基礎統計量とI-T相関を算出した。その結果、いずれの項目も天井効果も床効果も確認されず、I-T相関は良好な値( $r = .68 \sim .82$ )を示したため、同尺度には、削除すべき項目はないと判断した。

次に、同尺度6項目に対して因子数を検討した。カイザー・ガットマン基準により検討したところ因子の固有値は、3.33, 1.03, 0.60と減衰したため2因子解が支持され、対角SMC(Squared Multiple Correlation)分析でも2因子解が支持された。因子分析を試みたところ、1. 学校全般, 2. 管理職(校長・副校長・教頭), 3. 同僚(管理職以外の教員)といった教員に関する項目群と、4. 児童生徒, 5. 保護者, 6. 地域住民といった教員以外の対人関係の項目群に分類されたが不適解であった。そこで、MAP(Minimum Average Partial

Correlation) 分析で支持された 1 因子解で再分析を試みたところ、適解となったため 1 因子解を採用した。なお、1 因子解の信頼性係数は良好であった ( $\alpha = .84$ )。以後の分析では、学校教員の対人関係満足度尺度全 6 項目の平均得点を用いた。以上の分析結果を Table 1 に示した。

Table 1 学校教員の対人関係満足度尺度に対する因子分析と基礎統計量, I-T 相関

| 項目番号 | 項目内容                        | F1  | $h^2$ | $M$  | $SD$ | I-T 相関 |
|------|-----------------------------|-----|-------|------|------|--------|
| 3.   | 同僚（管理職以外の教員）との人間関係に満足している   | .84 | .70   | 4.79 | 1.48 | .82    |
| 1.   | 学校における人間関係全般に満足している         | .79 | .63   | 4.65 | 1.45 | .79    |
| 2.   | 管理職（校長・副校長・教頭）との人間関係に満足している | .67 | .45   | 4.29 | 1.57 | .73    |
| 6.   | 地域住民との人間関係に満足している           | .62 | .39   | 4.19 | 1.19 | .70    |
| 5.   | 保護者との人間関係に満足している            | .56 | .32   | 4.47 | 1.22 | .70    |
| 4.   | 児童生徒との人間関係に満足している           | .56 | .31   | 5.04 | 1.23 | .68    |

### 各変数の基礎統計量の分析

各尺度の基礎統計量と信頼性分析の結果を Table2 に示した。床効果や天井効果を検討したところ、対人関係満足度 ( $M = 4.57$ ,  $SD = 1.01$ ) やコミュニケーションスキル ( $M = 4.25$ ,  $SD = 1.06$ )、SOC（把握可能感;  $M = 3.81$ ,  $SD = 0.93$ , 処理可能感;  $M = 4.40$ ,  $SD = 0.90$ , 有意味感;  $M = 4.73$ ,  $SD = 1.08$ , SOC 全体;  $M = 4.27$ ,  $SD = 0.84$ )、バーンアウト症状（情緒的消耗感;  $M = 3.10$ ,  $SD = 1.04$ , 脱人格化;  $M = 3.17$ ,  $SD = 0.82$ , 個人的達成感;  $M = 2.38$ ,  $SD = 1.01$ ) の全変数で値の偏りは確認されなかった。また、全変数の内的整合性も良好な値 ( $\alpha s = .79-.92$ ) を示した。

Table 2 全変数の基礎統計量の分析結果

| 変数名          | $M$  | $SD$ | $\alpha$ |
|--------------|------|------|----------|
| 対人関係満足度      | 4.57 | 1.01 | .84      |
| SOC          |      |      |          |
| 把握可能感        | 3.81 | 0.93 | .79      |
| 処理可能感        | 4.40 | 0.90 | .86      |
| 有意味感         | 4.73 | 1.08 | .83      |
| SOC 全体       | 4.27 | 0.84 | .92      |
| コミュニケーションスキル | 4.25 | 1.06 | .88      |
| バーンアウト症状     |      |      |          |
| 情緒的消耗感       | 3.10 | 1.04 | .85      |
| 脱人格化         | 3.17 | 0.82 | .82      |
| 個人的達成感の低下    | 2.38 | 1.01 | .88      |

### 対人関係満足度尺度と各変数の相関分析

学校教員の対人関係満足度と SOC, コミュニケーションスキル, バーンアウト症状との相関分析を実施した (Table 3)。

学校教員の対人関係満足度は、処理可能感 ( $r = .39$ ,  $p < .001$ ) や有意味感 ( $r = .44$ ,  $p < .001$ )、コミュニケーションスキル ( $r = .31$ ,  $p < .001$ ) と有意な正の相関を示したのに対して、脱人格化 ( $r = -.48$ ,  $p < .001$ )、個人的達成感の低下 ( $r = -.36$ ,  $p < .001$ ) とは有意な負

の相関を示した。また、学校教員の対人関係満足度は把握可能感 ( $r = .12, p = .25$ ) や、情緒的消耗感 ( $r = -.10, p = .18$ ) とは無相関であった。

Table 3 学校教員の対人関係満足度と各変数の相関分析の結果

|              | $r$  | $p$    |
|--------------|------|--------|
| SOC          |      |        |
| 把握可能感        | .12  | .18    |
| 処理可能感        | .39  | < .001 |
| 有意味感         | .44  | < .001 |
| SOC全体        | .35  | < .001 |
| コミュニケーションスキル | .31  | < .001 |
| バーンアウト症状     |      |        |
| 情緒的消耗感       | -.10 | .25    |
| 脱人格化         | -.48 | < .001 |
| 個人的達成感の低下    | -.36 | < .001 |

### 対人関係満足度の高い学校教員の特徴の検討

対人関係満足度の高い学校教員の心理的特徴を検討した。まず、対人関係満足度を投入した階層的クラスタ分析（ウォード法・ユークリッド距離）により、解釈可能な4クラスタに分類した。さらに、全変数を標準得点化し、各クラスタの変数の平均値をFigure 1に図示した。

クラスタ1 ( $N = 40$ ) は対人関係満足度がやや低い群で、クラスタ2 ( $N = 47$ ) は対人関係満足度がやや高い群であった。いずれのクラスタもSOCやコミュニケーションスキル、バーンアウト症状の得点は平均的であった。一方、クラスタ3 ( $N = 11$ ) は、対人関係満足度が極めて低く、コミュニケーションスキルやSOCが低く、バーンアウト症状が高じている健康度の低い群であった。クラスタ4 ( $N = 26$ ) は、対人関係満足度が高く、コミュニケーションスキルやSOCが高く、バーンアウト症状が低い健康度の高い群であった。

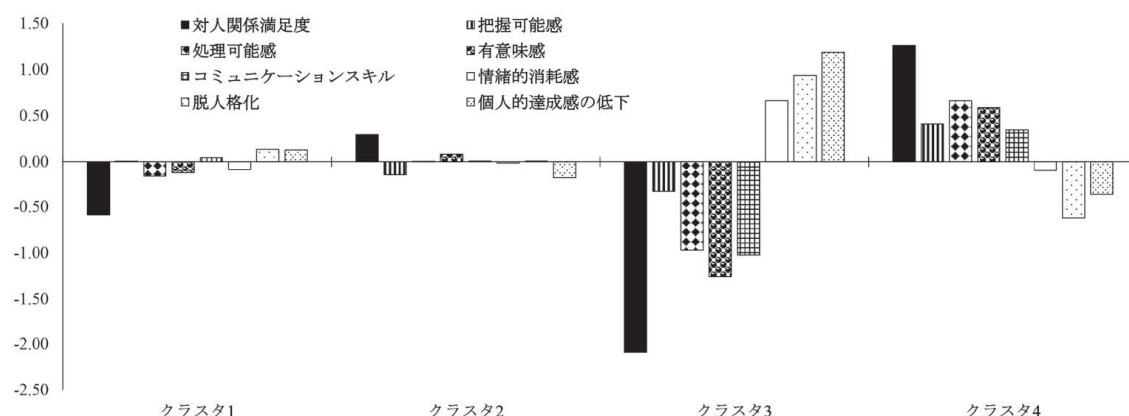


Figure 1 各クラスタの心理的特徴

## 考察

本研究の目的は、学校教員の対人関係満足度尺度を試作することと、対人関係満足度が高い学校教員の心理的特徴を検討することであった。分析の結果、学校教員の対人関係満足度尺度は6項目1因子解であることと、対人関係満足度の高い学校教員はコミュニケーションスキルやSOCが高く、バーンアウト症状が低いことがそれぞれ分かった。

### 学校教員の対人関係満足度尺度の試作

まず、学校教員の対人関係満足度尺度の項目を因子分析したところ、1因子解での解釈が妥当と判断された。しかし、2因子解の場合、不適解であったものの教員の項目群と教員以外の項目群に分類された。尺度作成において、1概念につき、10～15個程度の項目数が望ましい点(中村, 2007)を考慮すると、本研究では6項目であったため、2因子構造を仮定するのであれば極めて少ない項目数であったかもしれない。そのため、項目数を追加しての再検討が必要である。なお、本研究では、学校教員の対人関係について、著者間で協議した上で6領域(1. 学校全般, 2. 管理職(校長・教頭), 3. 同僚(管理職以外の教員), 4. 児童生徒, 5. 保護者, 6. 地域住民)に設定した。これらの領域について、校長や教頭を区別することなく管理職とした点や、学年主任や養護教諭を同僚と区別しなかった。また、児童生徒や保護者を回答者の担任する学級内とそれ以外でも対人関係の性質は異なることが容易に予測される。今後、同尺度が2因子構造である可能性を考慮するのであれば、こうした観点での項目追加を検討する必要がある。

なお、同尺度を1因子解とした場合、 $\alpha$ 係数が十分高い値を示したことから、同尺度は一定の信頼性を有することが示された。また、学校教員の対人関係満足度は、SOCの処理可能感や有意味感およびコミュニケーションスキルと正の相関が、バーンアウト症状の脱人格化や個人的達成感の低下とは負の相関がそれぞれ確認された。これは、対人関係の満足度が健康的な指標であることを示しており、一般大学生などの友人関係満足度と同様の結果(e.g., 牧野, 2012)を示している。以上から、同尺度は構成概念妥当性を有することが示された。しかし、対人関係満足度は把握可能感や情緒的消耗感とは無相関であった。把握可能感はストレスを把握できている感覚であり(Antonovsky, 1987, 山崎・吉井監訳 2001, pp.222-225)、学校教員のストレスは、同僚や児童生徒・保護者といった対人関係上のストレスの他にも、授業などの職務上のストレスなども指摘されている(高木・田中, 2003)。そのため、対人関係満足度が高い学校教員は対人ストレスについては把握できていると考えられるが、職務上のストレスなどについては把握できているとは限らない。それ故に対人関係満足度と把握可能感は無相関であったのかもしれない。また、情緒的消耗感は精神的に疲弊した状態である(久保, 2004)が、対人関係に満足していたとしても学校教員の業務量は多忙である(青木・堀内, 2014)。そのため、情緒的に消耗するのは避けられないのかもしれない。

## 対人関係満足度が高い学校教員の心理的特徴の検討

クラスタ分析によって、対人関係満足度の高い学校教員の群の抽出を試みた。その結果、対人関係満足度の高い学校教員の群（クラスタ4）が抽出された。対人関係満足度が高い群であるクラスタ4では、SOCやコミュニケーションスキルが高く、バーンアウト症状が低い群であった。そのため、対人関係に満足している学校教員は健康的であるといった仮説は実証されたと思われる。他方、対人関係満足度が極めて低いクラスタ3では、SOCやコミュニケーションスキルが低く、バーンアウト症状が高い群であった。クラスタ3は、対人関係がストレスラーとして悪影響を及ぼしている健康度の低い群と考えられる。

クラスタ1と2は、対人関係の満足度に若干の多寡はあるものの、SOCやコミュニケーションスキル、バーンアウト症状は平均的であった。なお、健康度の高い学校教員のクラスタ4は124名中24名とデータの約2割程度存在し、健康度の低い学校教員のクラスタ3は124名中11名とデータの1割に満たなかったものの一定数存在した。以上から、学校教員の対人関係の満足度を高める何らかの心理的支援によって、学校教員全体の健康度を高める試みは必要であろう。

## 限界と課題

本研究は、一度きりの横断調査によって得られたデータを分析対象とした。そのため、学校教員の対人関係満足度の再検査信頼性は検証することができない。また、本研究の分析から2因子解の可能性を考慮すると、項目を追加しての再分析も必要であろう。

## 引用文献

- Antonovsky, A. (1987). Unraveling the mystery of health: How people manage stress and stay well. Jossey-Bass Publishers, San Francisco. (アントノフスキー, A. 山崎喜比古・吉井 清子 (監訳) (2001). 健康の謎を解く—ストレス対処と健康保持のメカニズム— 有信堂)
- 青木 純一・堀内 正志 (2014). 教員の多忙化をめぐる経緯と教員勤務実態調査に関する一考察—学校における効果的な多忙化対策の基本的論点を探る—. 日本女子体育大学紀要, 44, 17-26.
- 藤本 学・大坊 郁夫 (2007). コミュニケーションスキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み. パーソナリティ研究, 15 (3), 347-361.
- 磯和 壮太郎・今井田 貴裕 (2021). 学校教員におけるコミュニケーションの得手不得手意識がSense of Coherenceを媒介して専門性向上意識に及ぼす影響—学校組織風土認知を調整要因として—. くらしき作陽大学・作陽短期大学研究紀要, 53, 11-22.
- 加藤 司 (2001). 対人ストレス過程の検証. 教育心理学研究, 49, 295-304.
- 鬼頭 美江・佐藤 剛介 (2017). 夫婦関係満足感に与える自尊心の影響—夫婦データを用

- いた APIM による検討-. 実験社会心理学研究, 56 (2), 187-194.
- 久保 真人 (2004). バーンアウトの心理学 燃え尽き症候群とは. サイエンス社.
- 牧野 幸志. (2012). 青年期におけるコミュニケーション・スキルと友人関係-同性・異性友人に対するコミュニケーション・スキルの性差, 学年差の検討. 経営情報研究-. 摂南大学経営情報学部論集, 20 (1), 17-32.
- 森 慶輔. (2007). 学校内サポートが中学校教員の心理的ストレスに及ぼす影響 (2) -サポートのずれに焦点を当てて-. 学校メンタルヘルス, 10, 65-74.
- 森 慶輔・西村 昭徳・宮下 敏恵・奥村 太一・北島 正人 (2013). 中学校教師におけるバーンアウト尺度の因子構造の検討. パーソナリティ研究, 21, 278-290.
- 中村 知靖. (2007). 心理尺度作成における因子分析の利用法. 教育心理学年報, 46, 42-45.
- 迫田 裕子・田中 宏二・淵上 克義 (2004). 教師が認知する校長からのソーシャル・サポートに関する研究. 教育心理学研究, 52 (4), 448-457.
- 清水 裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD--機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案-. メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- 諏訪 英広 (2004). 教員社会におけるソーシャルサポートに関する研究--ポジティブ及びネガティブな側面の分析-. 日本教育経営学会紀要, 46, 78-92.
- 高木 亮・田中 宏二 (2003). 教師の職業ストレスに関する研究--教師の職業ストレスとバーンアウトの関係を中心に-. 教育心理学研究, 51 (2), 165-174.